慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	啓明結社とフリーメイソン : アドルフ・ フライヘア・ クニッゲにおける「啓蒙と秘密」(II)
Sub Title	Illuminaten und Freimaurerei : "Aufklärung und Geheimnis bei Adolf Freiherrn Knigge (II)"
Author	斎藤, 太郎(Saito, Taro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.66, (1994. 7) ,p.161(18)- 178(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00660001-0178

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

啓明結社とフリーメイソン

——アドルフ・フライヘア・クニッゲにおける「啓蒙と秘密」(II)——

斎藤　太郎

「高位階者は下位の者に対して常に隠されていなければならない。自分の知る人間の命令より、未知の人間の命令の方が受入れやすいものだからだ。知己の場合には次第にその人の欠点が目につくようになるものである。部下を観察するについてもその方が好都合である。彼らも周りに絶えず監視者の目があると信ずる方が、優れた慎重な行動を取るであろう。そしてその状態が続くならばやがては美徳が習慣となるのである。何事も秘密である方が魅力が増す。世の人は不可思議なるものを大層好むものであるし、新たな位階に昇級するごとに新たな人々を知るというのは心地好い驚きであるからだ」[1)]　啓明結社の上層部に対する指令集の中のこの一項には、啓蒙主義の推進を目指す結社が、その目的遂行のために成員に対して真実の意図的な秘匿を行わなければならないというディレンマが如実に表現されている。カール・フリードリヒ・バールトは、18世紀後期の時代相を総括して「賢者も愚者も啓蒙主義と秘密結社という二個の奇妙な玩具の馬を乗り回してはしゃいでいる」[2)]と評しているが、アドルフ・フライヘア・クニッゲもまた、啓明結社への参加によって啓蒙と秘密の整合性という困難な問題に直面した一人であった。

*

1780年7月1日に啓明結社員となったクニッゲに対し、アダム・ヴァイスハウプトは自分の結社創設者という立場を隠し，「上司による命令」を装って書簡による接触を開始した。彼は啓明結社を「遠方の地」に本拠を

構える「結社の最高指導者たち」の指揮の下「人間と世界を新たに改造する組織」として描き出し，クニッゲに結社への「忠誠心の証を立てるため」に結社員の勧誘をおこなうよう指令する(37)。[3]結社がすでに長い歴史と完成された組織を有するものだとのヴァイスハウプトの言葉を信じたクニッゲは，手始めに，以前に自分のフリーメイソン改革計画への参加を呼びかけたフリーメイソン会員を勧誘したが，彼らを通じてさらにねずみ算式に新規参加者が増加し，短期間の内に，クニッゲ自身の証言によれば500人が啓明結社の会員となった。

これほど劇的な会員増が可能となったのは，結社の「精神」を「熱烈な感激をもって」(42) 伝道するクニッゲの雄弁によるところも勿論大きかったが，それと並んで新規参入した人々の内に，既成のフリーメイソン流派に対する失望が広がっていたことも背景にあった。ドイツのフリーメイソン・ロッジのほとんどを傘下に収めていた高位階制のフリーメイソン「厳格な服従」において，聖堂騎士団起源説はようやく信憑性を失いつつあり，また「知られざる長」の使者と称する者の詐欺行為が度重なっていた。啓明結社は，一般の会員の間に高まっていた「新たな，よりよいフリーメイソン」を求める気運に乗じて登場したのである。しかしながら，既成のフリーメイソンにおいて失望と幻滅を経験してきた会員たちは，啓明結社の目的や「知られざる長」に対しても懐疑的にならざるをえず，クニッゲに対し上位の位階を与えるよう迫り始める。自分自身「小啓明士」級に留めおかれて，結社の全体像を知らされていなかったクニッゲは，彼の下部の会員たちのこうした要求に応えるため，1781年ヴァイスハウプトに対し自分に結社の実情を明かすよう書き送った。ここに及んでヴァイスハウプトはようやく，「結社は実際のところまだ彼の頭の中に存在しているだけであり，下部級である養成級が二三のカトリック地域で設立されているにすぎない」事実をクニッゲに伝える (54)。

ヴァイスハウプトの告白が実情を偽りなく伝えていたことは，1781年7月9日にヴァイスハウプトとミュンヘンの「アレオパゴス」会員によって署名された『結社の目的，手段，組織に関するアレオパゴス共同決議』[4]

が裏付けている。この文書においては，結社の目的が学校制度の改善と有用な知識の普及を通じて啓蒙主義を促進することであり，その手段として「経験に富み，啓蒙された誠実な人間を集めるか，あるいはそうした人間を自分たちで養成し」，これらを上の目的に適った社会的部署に配置することが述べられている。そして結社の意図に適う人間を見極め，育成するために，また「秘密結社の存続」を保証するために不可欠なものとして「人間に関する諸知識」が挙げられ，人間学研究のために独自の位階を設置すべき旨記されている。結社の組織は「小密議」と「大密議」の二クラスから成ることとされ，「小密議」はさらに 1. ミネルヴァ位階 2. 小啓明士 3. 大啓明士 4. 監督啓明士 5. 学術位階に区分されている。ただし，この時点で実際に完成していたのは「ミネルヴァ位階」と「小啓明士」の二位階だけであり，他は構想の段階に留まっていた。

こうした真相を明かし，これまでの「ささやかな偽り」を詫びた上でヴァイスハウプトは，クニッゲこそは自分が探し求めていた協力者であると賞賛し，彼に自分が収集した「数多くの素晴らしい資料」を基に上位の位階を作成し，結社組織を完成させるよう依頼した (55)。クニッゲは彼自身が思い描き，彼の「部下たち」にも伝えた結社の理想像と現実との隔たりに「途方もない困惑」を覚えながらも，彼はヴァイスハウプトの「気高い意図」に対して全面的な協力を申し出る (55)。これによってクニッゲは有能な勧誘者の域に留まらぬ，「新たな結社創設者」[5]となるのである。

彼は1781年11月，ヴァイスハウプトの依頼でフランクフルトを立ち，フランケン，シュヴァーベンを通ってバイエルンへ赴いた。その目的はヴァイスハウプトおよびミュンヘンの「アレオパゴス」メンバーと直接結社の将来計画を論議することだったが，同時にヴァイスハウプトとミュンヘンの「アレオパゴス」メンバーとの間に生じた争いを調停する役目も負うことになった。結社創設直後，ヴァイスハウプトは専らインゴルシュタットの自分の学生を中心に若い人々をメンバーに迎え，これらに対する絶対の優位のもと指導に当たるという方針をとっていた。ところが彼のかつての学生で，プファルツ宮廷顧問官であるフランツ・クサーヴァー・フォン・

ツヴァック（結社員名「カトー」）が入会し，その誘いでさらにバイエルンの有力な宮廷官僚が結社に参加して，これらが数的に初期学生結社員を凌駕するようになると，彼とミュンヘンの有力メンバー「アレオパゴス」の間に様々な齟齬が生じた。ヴァイスハウプトは1779年に彼らの要求を容れて「アレオパゴス」を正式に結社の共同指導に当たる「最高委員会」として承認したが，その後も結社の指導方針を巡って対立が続いていた。「アレオパゴス」側の見るところでは，この対立はヴァイスハウプトの専制的指導スタイルと戦闘的・批判的性格に起因していた。クニッゲは彼らのヴァイスハウプトに対する苦情を伝えている。「彼らは彼（ヴァイスハウプト）の強情さと専制主義について不満を述べていた。(...) 彼は自分を全人類中第一の人間，第二のメシアだと思い込んでいて，自分に阿ねる者の言うことしか取り合わない，というのである」(76) 他方で，カリスマ的指導者たらんとするヴァイスハウプトの目には，「アレオパゴス」メンバーたちの働きは自分の掲げる理想主義的結社の中核として相応しくないものと映っていた。[6]こうした非難の応酬には感情のもつれから来る誇張が少なからずあったと思われるが，問題の根源は結社の理念と実践的方針に明確な輪郭が存在していなかったところにあった。「彼ら（ヴァイスハウプトと「アレオパゴス」メンバー）の間では，結社の最終的な主目的は何であるべきか，という問いがいまだに投げかけられていた。広く啓蒙主義を促進すること，互いを護り助けること，メンバーにその働きと能力に応じた社会的地位を与えること，これが全員に支配的な考えだった。しかし，まさにこの啓蒙主義に関する彼らの観念がまことに曖昧なものだったのである」(71)

クニッゲは，彼らとの議論を通じてひとまず結社内部に平和と安定をもたらすことに成功する。この旅の成果を伝える資料が1781年12月20日の『アレオパゴス会員間の相互契約』である。[7]この文書は，ヴァイスハウプトの絶対的権限に制限を加えて，彼とクニッゲを含む「アレオパゴス」との合議制による結社運営を定め，結社の組織構造が最終的に取るべき形態を決定した。それによれば結社のこの時点での組織は以下のようになる。

I. ミネルヴァ（ 1. 修練士 2. ミネルヴァ 3. ミネルヴァ啓明士，別称小啓明士）II. フリーメイソン（ 1. 徒弟 2. 職人 3. 親方）III. 密議（1. 大啓明士，別称スコットランド修練士 2. 監督啓明士，別称スコットランド騎士)。さらにこの上位には「僧侶」と「統治者」からなる「大密議」が置かれることが決められ，クニッゲには，ヴァイスハウプトの収集した資料を基にこれらを完成させる権限が認められた。クニッゲはこの任務を情熱的に遂行し，1782年12月には「新たな結社組織図」を提出する。これによる結社の組織は以下の通りである。

I. 養成級（Pflanzshcule）
  1. 修練士（Novize）
  2. ミネルヴァ（Minerval）
  3. 小啓明士（Illuminatus minor）
II. フリーメイソン級（Maurerklasse）
  1. a）徒弟（Lehrling）b）職人（Geselle）c）親方（Meister）
  2. 大啓明士（Illuminatus major），別称スコットランド修練士（Schottischer Novize）
  3. 監督啓明士（Illuminatus dirigens），別称スコットランド騎士（Schottischer Ritter）
III. 秘儀級（Mysterienklasse）
  1. 小密儀（Kleine Mysterien）
    a）司祭（Priester）b）摂政（Regent）
  2. 大密儀（Große Mysterien）[8)]
    a）賢者（Magus） b）王（Rex）

クニッゲの主導の下に成立した結社計画には二つの本質的な改革が認められる。すなわち，フリーメイソンを独立のクラスとして結社組織の中に組み込んだこと，そして他の位階にフリーメイソン儀礼を導入したことである。その結果「ミネルヴァ級」は「新たなフリーメイソン制度」のため

の準備クラスと位置づけられ，一般的な「ヨハネ三位階」の上に大啓明士位階から密議級までを包括して「啓明フリーメイソン」と呼ばれる「秘密の段階」が置かれ，ここには結社の目的に適うと認められた者のみ参入が許されるとされた。この改革によって「取るに足らぬミネルヴァ結社」は「新たなフリーメイソン制度」への再編成を果たしたのである。[9]

*

こうした組織の外的枠組みが整備されてゆくのと平行して，結社の目標理念の構築も進められた。その結実が，『新たに採用される監督啓明士に告ぐ』[10]である。1782年にヴァイスハウプトによって起草され，クニッゲによる僅かな補筆を経て最終的には『第一の部屋における教授』の題で「司祭」位階への参入儀礼に組入れられたこの文書においては，結社の政治的，社会的，宗教的な最終目標が展開されている。その内容は多くの結社員によって啓蒙主義精神の神髄と賞賛される一方で，1787年の『啓明結社原典資料集補遺』の公刊によって世に出ると，敵側陣営からは宗教と君主国家にたいする謀叛を企てる「啓明主義」の動かぬ証拠であると見なされ，フランス革命勃発後は，反革命陣営によってジャコバン派を準備する思想とされた。この文書の概要は以下の通りである。

人類の歴史は「神と自然の計画」に従って原初の自然状態（幼年期），専制主義の時代（青年期），理性と道徳の時代（成人期）と段階的に完成へ向かう。この歴史的発展の原動力は人間に内在する欲求である。「新たな欲求の一つ一つはいわば新たな変化，新たな状態，より良い状況を芽ばえさせる種子なのである。欲求は人間を活動へと刺激し，人間の中に，この欲求を満たし，消し去りたいという活力を生み出すからだ」充足さるべき欲求が最小限であるがゆえ，原始においては全ての人間の間に平等と自由が保たれている。だが，人口が増加し，新たな欲求が発見され，私有財産が導入されると，文明とともに自由と平等の喪失が始まる。弱者は庇護

への欲求から強者に服従することを選ぶが，まだ人間の自由と独立はかろうじて保たれている。ところが強者が「自然を超えた存在」，「神の使者」を僭称し，人類が多くの民族，国家へと分裂するに及んで，世界はもはや「巨大な一家族，唯一の王国であることを止め，自然の大いなる絆は裁ち切られてしまう」エゴイズムと国家主義が人間愛にとって代わり，自由と平等は失われて隷属が支配するようになる。国王はついには国家を私有財産と見なすに到り，他の国家に対して戦争を起こし，奴隷制を導入する。この歴史段階において人間の行動の動因は恐怖のみである。だが，こうした状態が続く中で君主は，国家と君主自身の利益のためには支配下の国民が盲従するばかりの愚民に留まっていることは得策ではないと知る。自分の「征服欲を満たし，他国を屈伏させるため」には理性の活用が不可避である，との認識と共に「とてつもないメタモルフォーゼ」が起こる。君主のエゴイズムに起因しながらも，理性の支配は学問や産業の開花をもたらし，政治的抑圧を減少させ，自由の復活を招くことによって「人間精神の革命」を準備する。これによって人類史の第三期が始まる。「啓蒙専制君主」による改革の成果を保持し，過去への頽落を防止するために，社会の「選ばれし最良の者たち」，すなわち啓蒙主義者は自己組織を始める。彼らの目的は，専制主義によって破壊された人間の諸権利を自然の法則に適った形で回復し，啓蒙と道徳の促進を通じて「君主と国家が不要な」体制を築き，最終的には理性が「人間の唯一の法典」であり，全人類が再び「一つの家族となって，世界が理性的人間の住処となる」ような状態を実現することである。

この歴史哲学において秘密結社（ヴァイスハウプトは「叡知の秘密養成所（geheime Weisheitsschule)」という語を用いている）には，神の救済計画の担い手という世界史的機能と共に，キリスト教の正統な嫡子としての意義が与えられている。すなわち，結社が伝道すべき啓蒙主義の精髄とは「イエスとその使徒たちの神の教え」に他ならない。なぜならイエスが目指したのは「人間たちにその本源的な自由と権利を再びもたらす」ことであり，その意味でキリスト教は理性宗教そのものだからである。しかし

ながら，世俗世界において君主の支配が自由と平等を破壊したように，精神世界においては教会の専制主義が，イエスの本来の意図を誤解し，人間精神の隷属化を招いてしまった。本源的なキリスト教はそれゆえ「フリーメイソンの衣装を纏って」秘密の裡に保存され，伝承された。しかしフリーメイソンもまた，次第に本来の使命を忘却して，錬金術や党派間の抗争に明け暮れている。こうした状況において，「選ばれし者たちの同盟」である啓明結社だけがイエスの教えの理想的体現者である。

後の反啓明結社陣営による攻撃の矛先は，結社の政治的目標として「君主と国家が暴力行為を経ずして地上から消滅する」[11]ような体制が掲げられていた点に向けられたが，これと並んで最も声高な非難は，結社が理神論の唱道によってキリスト教の破壊を画策していたというものであった。[12]クニッゲは『フィロの説明』の中で，こうした告発に対して潔白を証明しようと試み，彼が作成した「スコットランド位階」が「キリスト教に対する心の底からの温かな崇敬が光りを放っている」(106) ことをその例証として挙げている。しかしながら，彼が「キリスト教の保持に努めることが重要である」(105) と主張するとき，彼が念頭においているのは奇蹟，復活，三位一体，悪魔，天地創造などの超自然的真理に立脚する正統的キリスト教ではなく，その教義が「自然に適」っているもの，つまり理性的根拠に裏付けされた宗教である。1783年の著作『専制主義，蒙昧，迷信，不正，不実，怠惰に対する六の説教』の中で彼はこう述べている。「われわれの聖なる宗教は，まともな理性を備えた人間が納得できないような掟，自然宗教に反するような掟は一つたりともわれわれに教えていない」[13]明確に理神論的な傾向を見せるこうした見解にもかかわらず彼が「キリスト教の保持」に固執するのは，むしろ公然たる理神論者から熱狂的信仰者に至る多種多様な結社員を統率する必要性から出た，極めて実践的な判断であった。「各時代の持つ欲求のことを充分考慮しなければならない。さて，今日では坊主どもの欺瞞行為ゆえにほとんどすべての人間がキリスト教に憤っているのだが，ところがその同じ時代において，常にす

がるものが欲しい人間にはありがちなことだが，またもや最悪の狂信主義がはびこりつつある。こうした二種類の人間たちに働きかけ，これを一つに結びつけるには，狂信者を理性へ導き，無神論者が子供を風呂の湯もろとも流してしまわないようにするような，そういうキリスト教解釈を考えだした上で，その解釈をフリーメイソンの奥義とし，われわれの目的のために利用しなければならない。(...) こういうことにしよう。イエスは何も新しい宗教を始めたのではなく，自然宗教と理性にいにしえの権利を回復させようとしたのだ，と」[14]「神の子」としてのではなく，理性原理を媒介する賢者としてのイエスという点についてはヴァイスハウプトも全く同様の見解を述べている。『監督啓明士に告ぐ』を書き上げた直後のツヴァック宛書簡で彼はこう書いている。「キリストの秘密の教えとは，こうした方法でユダヤ人の間に自由を導入することであり，フリーメイソンは隠れたキリスト教である――今や自分でもこう信じかけているほどだ。少なくともヒエログラフに関する私の解釈はこれに完全に適合する。私のキリスト教解釈に則るならば，キリスト教徒であることは何ら恥とするに当たるまい。なぜなら私は名称には手をつけず，中身を理性に置き換えたのだから」[15]フリーメイソンの歴史的意義は，理性の使用が抑圧されている時代にあって，誤った解釈や権力者の弾圧の危険性からイエスの教えを守り伝えるところにあるとされた。これによってフリーメイソンの啓明結社組織への編入が理論的に正当化されることになった。しかしながら，フリーメイソンを下部組織化する際の実践的局面においてクニッゲとヴァイスハウプトの間には，やがて最終的な決裂を準備することになる亀裂が生じるのである。

クニッゲの狙いは，啓明結社の組織を「完全にフリーメイソンに接合し，(...) われわれの仲間が様々な流派のロッジで主導権を握ることによって，無為な日々を送っている数多くのフリーメイソン会員たちを良き目的のために活動せしめる」(79) ことだった。ヴァイスハウプト自身，啓明結社会員の供給源としてのフリーメイソンの重要性は初期の段階から認識していたが，しかし，ヴァイスハウプトは啓明結社とフリーメイソンの

関係をいかに規定するかについてはいまだ具体的な方策は見出していなかった。[16]したがって，この件に関して「フリーメイソンのあらゆる分野に精通しており，開催予定だったヴィルヘルムスバートの会議に参加し大きな活躍が期待されていた」[17]クニッゲが主導権を取ったのは当然の帰結であった。クニッゲは入会直後の1780年11月23日付書簡[18]の中で「厳格な服従」の現況とヴィルヘルムスバート会議の展望に関するヴァイスハウプトの質問に答えているが，「重大な秘密」への参与を夢想するあまり「人間の道徳的形成」を忘れて各流派間の抗争に明け暮れるフリーメイソンの現況を素描したのち，自分がブラウンシュヴァイク公フェルディナントの委嘱により起草したフリーメイソン改革案の輪郭を提示している。これによると彼の構想する新しいフリーメイソンの全体はヨハネ三位階と高位四位階の七位階から構成され，最初の三位階では「道徳形成」による「心」の陶冶が，第四位階では「偏見」の除去による「知性」の「啓蒙」が，第五位階では社会的有用性の育成が，段階的に達成される。こうして「完成されたフリーメイソン会員」が，結社の「指導級」である第六位階に迎えられ，結社の「経済的，社会的計画」の促進に当たり，最高位である第七位階にはごく少数の人間が「高次の諸学」の共同研究に専念する，としている。クニッゲが「より良い」フリーメイソンを目指して創案したこの計画は，結局は計画のままに終わったが，その理念は啓明結社の改革に際して適用されることになった。彼がここで構想している，段階的な人間性の陶冶と秘密の開示，上部メンバーの監視による不適格者の結社からの排除は実行に移され，結社の運営担当部門と研究担当部門の分離は「摂政位階」と「司祭位階」の並立によって実現された。他方，「新しい結社組織図」においてヨハネ三位階に続く二位階が，「スコットランド修練士」，「スコットランド騎士」という，「厳格な服従」の位階を思わせる別称を有している事実は両義的である。この措置には，一方では両結社の類似性によって「厳格な服従」の会員を抵抗なく啓明結社に導くという戦略的意図が見てとれ，その限りにおいてはヴァイスハウプトの意に反するものではない。しかし他方では，このフリーメイソン制度に特徴的な疑似カトリック

的儀礼もまた同時に流入することになった。クニッゲは，「スコットランド・フリーメイソン風の簡素で感動的な儀式」を導入することによって，結社員がイエスの教義の正統な継承者であるとの自覚を高めることが出来ると説明している（105）。しかし，ヴァイスハウプトにとってこうした儀式の導入は，啓明結社が排除すべき宗教的迷信の侵入に他ならなかった。クニッゲの仕上げた位階に見られるこうした傾向についてヴァイスハウプトはこう述べている。「しかし，正直に言って，これらの位階のどれ一つとして私の気に入るものはない。すべてはひどく無味乾燥で，心や情念に訴えるものが乏しいのだ」[19]「スコットランドの騎士ごっこは私の趣味ではない」[20]ヴァイスハウプトの考えでは，啓明結社は影響力と有効性を失いつつあったフリーメイソンに取って代わるべき存在であるがゆえにこそ，フリーメイソンと啓明結社との異質性は断固として保持されねばならなかった。彼にとってフリーメイソンは自分の結社の隠れ蓑として有用な組織に過ぎず，その価値は徹底してこの機能的側面に限定されていた。これに対し，クニッゲは自ら『フィロの説明』の中で告白しているように，「なおも『厳格な服従』に一種の愛着」を持っており，これと啓明結社の「両組織を合体」させたいとの願望を抱いていた（83）。フリーメイソンに関する両者の見解の相違は，疑似宗教的儀礼の導入の是非のみならず，「厳格な服従」の中心メンバーである君侯の結社への勧誘の可否とも連動して，彼らの関係を次第に悪化させてゆく。それが一挙に表面化するのがヴィルヘルムスバートの国際フリーメイソン会議であった。

*

啓明結社がラインラントと北ドイツに向けて勢力を拡大していく上で決定的な転機となったのが，1782年7月16日から9月1日にかけてハーナウ近郊のヴィルヘルムスバートで開催された国際フリーメイソン会議だった。[21]ブラウンシュヴァイク公フェルディナントの号令を受けて招集されたこの会議は，本来は様々な流派の違いを超えたフリーメイソン全般の諸

問題を扱うべく構想されていたが，結局は他の高位階制フリーメイソンもイングランド・フリーメイソンも参加しなかったため，フリーメイソンの起源を聖堂騎士団に求める一派「厳格な服従」を改革によって崩壊の危機から救うことが目的となった。会議においては同結社の真の起源と目標，「聖堂騎士団」説の正当性および「知られざる長」の実在性が検証されたのみならず，儀礼の改良や結社と国家の支配秩序との，また世論との関係が問われた。さらには神秘学的知識の秘匿と合理的結社組織との整合性の問題も議題にのぼった。36回に及ぶ会議の結果，「厳格な服従」のイデオロギー的支柱であった聖堂騎士団起源説と「知られざる長」の存在は公式に否定されたが，従来の制度に代わりうるフリーメイソンのあり方については意見の統一を見ることはできなかった。延命のための一種の妥協案としてリヨンに本拠を置く「聖都市の善き騎士」(Chevaliers Bienfaisants de la Cité Sainte) の高位階制を採用することが決議されたが，この結果は，会議にかけられたフリーメイソン再生の期待に応えるものとは言いがたく，「善き騎士」制を採用するロッジの数は急激に減少していった。

既存の制度が葬られることによって生じた空隙は，競合する他のフリーメイソン流派や疑似フリーメイソン結社にそれぞれの唱える「真のフリーメイソン」を代替案として提供する絶好の機会を提供したが，この好機を徹底的に利用したのが啓明結社であった。結社はこの会議にヴェツラーの帝室裁判所司法官試補でフリーメイソン活動家としても高名なフランツ・ヴィルヘルム・フォン・ディトフルト（結社員名ミノス）とクニッゲの二人を派遣した。本来1780年12月の『アレオパグス会員間相互契約』において，クニッゲには会議での全権が承認されていたが，それにもかかわらず会議の正式参加者としてディトフルトが選ばれた事実には，結社のフリーメイソン対策に関してヴァイスハウプトのクニッゲに対する全幅の信頼がすでに失われつつあったことが窺われる。実際，この両者とも「厳格な服従」の崩壊を啓明結社に利するべく熱心に活動するのだが，その方法には顕著な相違があった。ディトフルトはヴァイスハウプトの支持を背景に，[22]会議の席上で啓明結社の急進啓蒙主義的立場を代表して「厳格な服

従」に見られる疑似宗教的要素を攻撃し，これを完全に破壊しようと努めた。その結果，彼の演説は他の会議参加者から反キリスト教的，煽動的であるとの非難を受け，演説内容の撤回と信仰告白の提出を要求された。これを拒否すると彼は会議参加資格を取消され，会期半ばにしてヴィルヘルムスバートを去っている。[23]これに対しクニッゲは会議自体には参加せず，フランクフルトのイングランド・ロッジにおいて，ヴィルヘルムスバートの決議に失望したフリーメイソン会員を個別に勧誘するという慎重な方法をとった。彼は「所を選ばずに見境なく理神論を鼓吹する」ディトフルトの「思慮に欠けた熱意」に憤って，それがフリーメイソン会員を結社に勧誘する上で最悪の行動だと激しく批判している。[24]クニッゲの認識では，人間と世界の本質を解明するには「理性の光だけで充分である」との思想は，「最高の知性を備えた人々」にしか受容されえない性質のものであり，大部分の人間にとっては，自分が「従うべき真理のための高度な権威」である既成宗教が必要不可欠であった（102f.）。それゆえ，人間の本質に内在するこうした欲求を理解しないディトフルトのような「理神論者の祈伏根性と不寛容は，坊主どものそれに劣らずいとわしいもの」[25]とされる

ディトフルトはヴィルヘルムスバートの会議の翌年，様々なフリーメイソン流派のゆるやかな結合体である「折衷同盟」(Eklektischer Bund) を組織する。この同盟は「象徴的三位階（ヨハネ位階）についてのみ同一の形式で活動」する他は「高位階を承認することも(...) 他の秘密結社において自分の幸福を築くこと」[26]も個々のロッジの裁量に委ねるという方針を取ったため，啓明結社にとって多様な体制のフリーメイソンに潜入し，これを内部から占拠するための理想的な可能性を開いた。ヴァイスハウプトは1783年１月11日のツヴァック宛書簡のなかでディトフルトの計画を賞賛してこう書いている。「われわれの最大の関心は，フリーメイソンに折衷同盟を導入することだ。これが成就したなら，われわれはすべてを恣いままにすることができる」[27]この一節は，結社のフリーメイソン戦略における指導的地位がクニッゲからディトフルトに移ったことを如実に表している。

クニッゲはディトフルトとヴァイスハウプトのこうした動きに対し，「厳格な服従」の指導者たちを獲得することで密かにこの組織を啓明結社の影響下に収めようと試みる。なかでも大きな成果となったのが，ワイマールの宮廷顧問官で「厳格な服従」の財務長官の任にあったヨーハン・ヨアヒム・クリストフ・ボーデの結社への参加であった。これも後に啓明結社員となるザクセン＝ゴータ公エルンスト二世の代理として会議に参加していたボーデは，これ以後クニッゲと並んで北ドイツおよび中部ドイツにおける最も熱心な結社活動家となる。レッシングの『ハンブルク演劇論』やクロップシュトックの『頌詩』の出版者として知られ，ニコライを中心とするベルリンの啓蒙主義者とも盛んな交流を持っていた彼は，フリーメイソンの世界においても，フリーメイソン関連の膨大な蔵書の所有者として，また「厳格な服従」の改革論者として極めて高名であった。彼の活躍により，ワイマールには啓明結社のさらなる重要な拠点が築かれ，ゲーテ（1783 年 2 月11日入会），ヘルダー（1783年 7 月 1 日入会），ザクセン＝ワイマール公カール・アウグスト（1783年 2 月10日入会）など，政治的・文化的影響力を持った人物が数多く結社員となった。[28]ボーデの指揮の下に上部ザクセンの啓明結社は，1780年代半ばにバイエルンで啓明結社が禁止され，消滅したのちも1790年代にいたるまで活動を続けることになる。

クニッゲはボーデの協力を背景に北ドイツにおけるフリーメイソン・ロッジに対し完全な支配権を確立しようと活動を続け，ついにはブラウンシュヴァイク公フェルディナントとヘッセン＝カッセル方伯カールという「厳格な服従」最高指導者である二人の君侯の勧誘に成功する。しかしヴァイスハウプトにとってこの一歩は，結社における自己の指導的地位だけでなく，結社の存立基盤そのものを危うくする行為と映った。ヴァイスハウプトは『管区長に与える訓令』の中で，「君侯の入会は極力避けるべき」であり，仮に入会したとしても結社の「政治的最終目標」が開示される司祭位階への昇級はさせぬよう指示している。「彼らを自由にしたならば，服従を拒否するばかりでなく，この上なく気高い意図すら自分の利益のために利用するであろうから」[29]「君主と国家が不要な体制」の実現を

目指す結社と君主の結社員という原理的な不整合に加えて，ヴァイスハウプトはディトフルトの影響の下，この二人を「厳格な服従」の非合理的・神秘主義的体質の典型と見なしていた。[30]

ヴァイスハウプトのクニッゲに対する非難は，彼の作成した位階に見られる「宗教的狂信」の要素に始まり，さらに下部結社員に対する統率力の欠如にも向けられて（「彼の担当地区はどうしようもなく混乱している」[31]）激しさを強めていたが，この二人の君侯の入会を機に，彼が「われわれに秘密の活動をおこなって，何か別の組織を築いている」という疑惑を抱くに至る。「フィロはまたしても呆れた愚行に精を出している。これではわれわれは『厳格な服従』に売り飛ばされたも同然だ。今後はわれわれにフェルディナント公の完全な支配下に入れというのだが，私の目の黒い内はそんなことをさせはしない」[32]実際クニッゲはヴァイスハウプトの絶対的指導性に制限を加え，結社の指導体制を「専制主義」から「共和主義」に移行させるという意図が「厳格な服従」の指導者勧誘の動機の一つであったことを述べている。[33]これに対しヴァイスハウプトは結社中枢部からクニッゲを排除することを決意して，その結社活動をこう総括している。「彼は多くの重要な人間の獲得を通じて結社に優れた功績を残したが，その他の点では私の力にならなかった。(...)彼はいくつもの無意味な位階を挿入することで私の計画の統一性を台無しにした。長いあいだ彼に譲歩してきたが，もはや彼のやることは度が過ぎている」[34]一方クニッゲもまたヴァイスハウプトの自分への絶対の服従の要求に「人間の独裁的支配」を意図する「イエズス会的専制主義」の現れを見て，彼に対する全面的対決の姿勢を明確にする。自分は「イエズス会総長の命令に盲目的に従う」ような人間ではなく，「インゴルシュタットの一教授に学生扱いされる」つもりはない，[35]と宣言したクニッゲは，最終的にボーデの仲介を経て1984年7月1日付で正式に啓明結社を脱退するのである。

クニッゲは『フィロの説明』の中で，啓明結社脱退以後「あらゆる秘密結社活動から手を引いた」(140)ことを明言し，『人間交際論』中の一章

『秘密結社員との交際について』においては秘密結社の有益性を否定する「信仰告白」を行っている。[36]そこで展開されている秘密結社批判には，ヴァイスハウプトとの抗争を通じて得た認識「スパルタクスが意図するようなやり方で人々を悪用し虐げる結社は，人々をイエズス会よりも酷い隷属状態に追いやるものだ」[37]が明確に反映している。しかし，こうした公的宣言にもかかわらず，クニッゲの生涯における「秘密結社員との交際」の章はとじられない。『フィロの説明』と『人間交際論』が出版された1788年，クニッゲはすでに次なる秘密結社活動の場を求めてカール・フリードリヒ・バールトの「ドイツ同盟」との接触を開始するのである。

注

(1) Die neuesten Arbeiten des Spartacus und Philo in dem Illuminaten-Orden jetzt zum erstenmal gedruckt, und zur Beherzigung bey gegenwärtigen Zeitläuften herausgegeben [von Ludwig Adolf Christian von Grolmann]. 1794. S.114f.

(2) [Carl Friedrich Bahrdt]: Über Aufklärung und Beförderungsmittel derselben, von einer Gesellschaft. Leipzig 1789, S.249

(3) [Adolf Freiherr Knigge]: Philo's endlische Erklärung und Antwort... Hannover 1788, in: Knigge, Sämtliche Werke. Bd.12, Nendeln/Liechtenstein 1978. 同書からの引用は本文中に頁数のみ挙げる。

(4) Gemeinschaftlicher Schluss des Areopagus über den Zweck, die Mittel und Einrichtung der Gesellschaft. In: Richard van Dülmen: Der Geheimbund der Illuminaten. Darstellung, Analyse, Dokumentation, 2.Aufl., Stuttgart/Bad Cannstatt 1977 (以下 van Dülmen と略), S.161-165.

(5) Franz Xaver Zwack: Geschichte des Illuminaten-Ordens. 1787. In: van Dülmen, S.336.

(6) 「ソクラテスは始終酔っぱらっているし，アウグストゥスは悪評紛々だ。アルキビアデスは日がな一日居酒屋の女将相手に秋嘆場を演じているし，ティベリウスはコリントでデモツェデスの妹を手篭めにしようとしてデモツェデスに取り押さえられる始末。まったく何たるアレオパゴス会員どもだ！」(Nachtrag von weiteren Originalschriften,

welche die Illuminatensekte... betreffen..., München 1787. S.68.

(7) Nachtrag von Originalschriften, II, S.8-17 ; van Dülmen, S.252-255.

(8) 「大密議」位階は名称だけの存在で，実際の導入には到らなかった。

(9) Geschichte des Illuminaten-Ordens von Fr. X. Zwack. In : van Dülmen, S.336f.

(10) Anrede an die neu aufzunehmenden Illuminatos dirigentes von A. Weishaupt. In : Nachtrag von Originalschriften, II, S. 44-121 ; van Dülmen, S. 166-194.

(11) Anrede.., S.80 ; van Dülmen, S.179.

(12) 「啓明結社員たちは僧侶支配を打破しようとしただけでなく，キリスト教そのものを破壊しようとしたのだ」(Johann August Starck : Nachtrag über den Kryptokatholizismus... Gießen 1788, S.124.

(13) [A. v. Knigge] : Sechs Predigten gegen Despotismus, Dummheit, Aberglauben, Ungerechtigkeit, Untreue und Müßiggang. Frankfurt a.M. 1783, S. 81f.

(14) 1783年 1 月20日付ツヴァック宛書簡。Nachtrag von Originalschriften, S. 104f.

(15) Nachtrag von Originalschriften, S. 68-71.

(16) ヴァイスハウプトの1781年 3 月10日付ツヴァック宛書簡。Einige Originalschriften des Illuminatenordens... München 1787, S.366, van Dülmen, S.248f.

(17) Geschichte des Illuminaten-Ordens von Fr.X. Zwack, van Dülmen, S.336.

(18) van Dülmen, S.240-242.

(19) ツヴァック宛書簡 (1781) Einige Originalschriften, S. 376

(20) 1782年 3 月15日付サヴィオリ宛書簡。Nachtrag von Originalschriften, S. 267

(21) ヴィルヘルムスバートの会議については Ludwig Hammermayer : Der Wilhelmsbader Freimaurer-Konvent von 1782. Heidelberg 1980 を参照。

(22) 「今やスパルタクス（ヴァイスハウプト）はミノスによって完全に支配されている」クニッゲの1783年 1 月ツヴァック宛書簡。Nachtrag von Originalschriften, S. 115.

(23) Franz Dietrich Freiherr von Ditfurth : Bericht über den Wilhelmsbader Konvent 1782. In : Hammermayer, S. 114-133.

(24) Nachtrag von Originalschriften, S. 205.

(25) Nachtrag von Originalschriften, S.205.

(26) [Adolf Freiherr Knigge] : Beytrag zur neuesten Geschichte des Freimaurerordens in neun Gesprächen, Berlin 1786, S.156.

(27) Nachtrag von Originalschriften, S.85.

(28) ゲーテ，ヘルダー，カール・アウグストの結社参加については長らく疑いがもたれていたが，ボーデの遺稿に基づいたW.ダニエル・ウィルソンの最近の研究(W. Daniel Wilson : Geheimräte gegen Geheimbünde, Stuttgart 1991) によって改めて実証された。

(29) Neueste Arbeiten von Spartacus und Philo. S.177.

(30) クニッゲの1783年3月31日付ツヴァック宛書簡。van Dülmen, S.323.

(31) ツヴァック宛書簡。Nachtrag von Originalschriften. S. 69.

(32) ツヴァック宛書簡。 van Dülmen, S.70.

(33) [Johann Christoph Bode] : Protokoll der Sitzung vom 12. 2. 1784. In : W. Daniel Wilson: Geheimräte gegen Geheimbünde. Stuttgart 1991.

(34) 1783年2月7日付ツヴァック宛書簡。Nachtrag von Originalschriften. S.96.

(35) 1783年3月26日付ツヴァック宛書簡。Nachtrag von Originalschriften. S. 125.

(36) Adolf Freiherr Knigge : Über den Umgang mit Menschen. Hrsg. v. Karl Heinz Göttert, Stuttgart 1991, S.401ff.

(37) 1783年1月付ツヴァック宛書簡。Nachtrag von Originalschriften. S. 117.